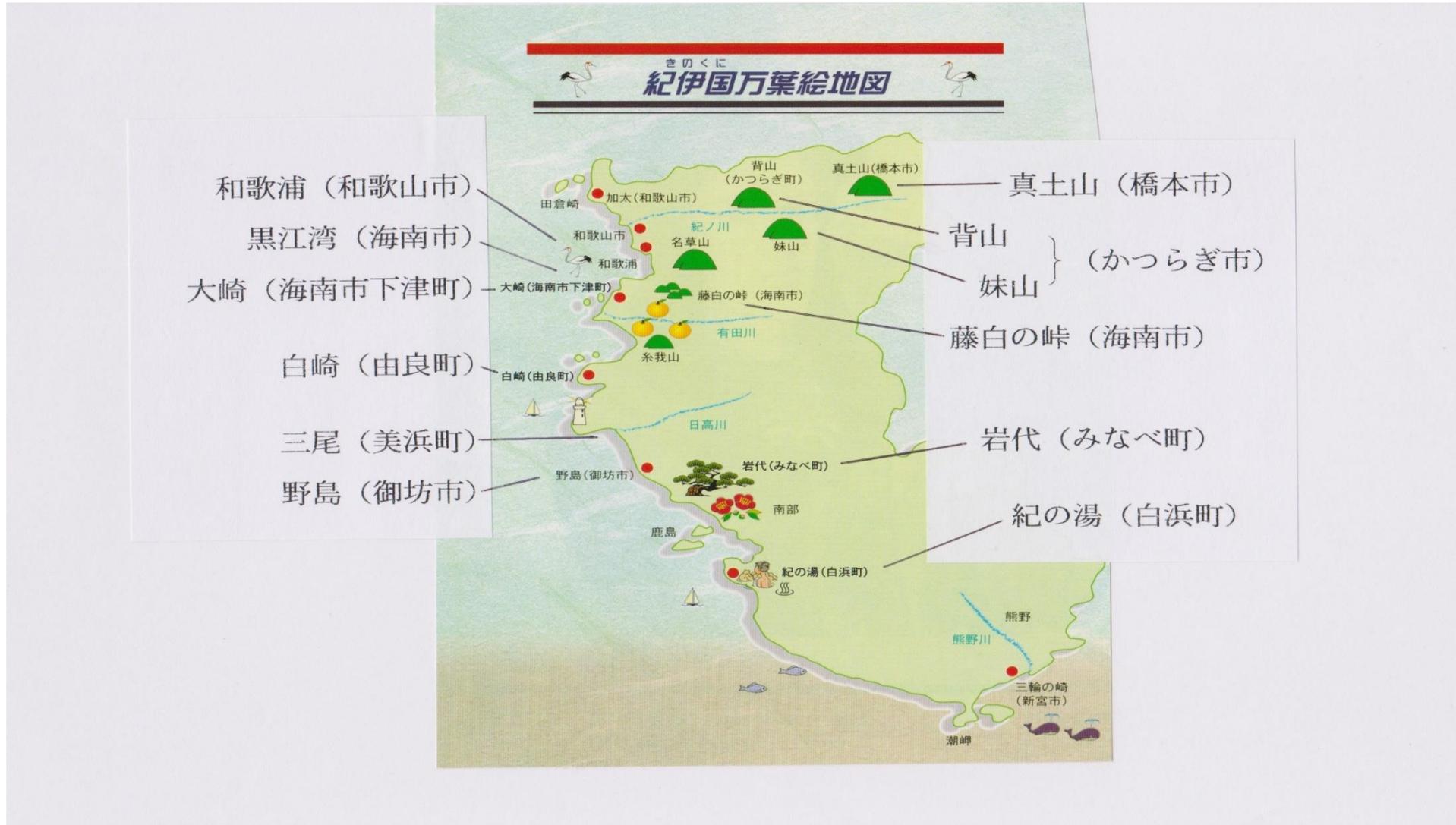


紀伊の国を旅した万葉人たち

1979(S45) 原子核・博 鶴田 隆雄



万葉年表(紀伊国編)

- 645 大化の改新、皇極天皇讓位、孝徳天皇即位、難波へ遷都。
- 653 皇太子:中大兄皇子、孝徳天皇を難波に残し飛鳥へ移る。
- 654 孝徳天皇崩御。 655 齊明天皇即位。
- 657 有間皇子、紀伊国牟婁温湯で療養、齊明天皇に推奨。
- 658 齊明天皇、中大兄皇子と共に牟婁温湯に行幸。その間、有間皇子、留守官:蘇我赤兄の謀略で捕らえられ、牟婁温湯に護送、帰途殺される。
- 661 齊明天皇崩御。 中大兄皇子称制、668に天智天皇として即位。
- 672 壬申の乱、天武天皇即位、飛鳥浄御原宮に遷都。
- 690 持統天皇、紀伊国行幸。 697 持統天皇讓位、文武天皇即位。
- 701 文武天皇、持統太上天皇と共に紀伊国行幸。
- 724 元正天皇讓位。 聖武天皇即位、紀伊国玉津嶋行幸。

紀和国境の真土山にて

(和歌山県橋本市隅田町真土)

白たへに

まつち

にほう真土の

山川に

あ

我が馬なづむ

家恋ふらしも

(7・1192)

あさもよし

き

紀伊へ行く君が

真土山

越ゆらむ今日そ

雨な降りそね

(9・1680)

妹の山と背と山を見て

(伊都郡かつらぎ町西渋田と高田)

わぎもこ

我妹子に

我が恋ひ行けば

ともしくも

並び居るかも

妹と背の山

(7・1210)

背の山に

ただ

直に向かへる

妹の山

ゆる

こと許せやも

打橋渡す

(7・1103)

最初に海を見ることになる玉津島・若の浦にて (和歌山市和歌浦3丁目)

玉津島

見れども飽かず

いかにして

包み持ち行かむ

見ぬ人のため

(7・1222)

神亀元年冬十月五日、紀伊国に幸したまひし時に、山部宿祢赤人の作りし歌

若の浦に

潮満ち来れば

淵をなみ

葦辺をさして

鶴鳴き渡る

(6・919)

大崎(海南省下津町)、黒江湾(海南省)にて

くろうしがた

黒牛湯

しほひ

潮干の浦を

くれない

紅の

玉裳裾引き

行くは誰が妻

(9・1672)

大崎の

神の小浜は

狭けれど

百船人も

過ぐといはなくに

(6・1023)

日高郡由良町大引白崎にて

白崎は

さきあ

幸く在り待て

大船に

ま梶しじ貫き

またかえり見む

(9・1668)

妹がため

玉を拾ふと

紀伊の国の

ゆら

湯羅の岬に

この日暮らしつ

(7・1220)

御坊市名田町野島、日高郡美浜町三尾にて

風早の

みほ

うらみ

三穂の浦廻を

漕ぐ舟の

舟人騒ぐ

波立つらしも

(7・1228)

中皇命の、紀の温泉に往き

たまいし時の御歌

我が欲りし

野島は見せつ

底深き

阿胡根の浦の

珠そ拾はぬ

(1・12)

齊明天皇4年(658)、有間皇子が謀略により捕らえられ、
牟婁温湯に護送される途中、岩代で詠んだ歌

有間皇子の自ら傷みて松
の枝に結びし歌二首

磐代の

浜松が枝を

引き結び

まさき

真幸くあらば

また還り見む

(2・141)

家にあれば

けもいい

筥に盛る飯を

草枕

旅にしあれば

椎の葉に盛る

(2・142)

有間皇子の事件(658)から40年余り、大宝元年(701)の 持統・文武行幸の際に随伴した官人の歌

ながのいみき おきまる
長忌寸意吉麻呂、結松を

あいえつ

見て哀咽せし歌二首

磐代の

きし

崖の松が枝

結びけむ

人はかへりて

また見けむかも

(2・143)

磐代の

野中に立てる

結び松

心も解けず

いにしえ

古思ほゆ

(2・144)

大宝元年(701)持統・文武行幸の際、随行の官人が
岩代で、また藤代坂で有間皇子を追慕して詠んだ歌

山上憶良の追和せる歌一首

翼なす

あり通いつつ

見らめども

人こそしらね

松は知るらむ

(2・145)

藤代の

み坂を越ゆと

白たえの

わが衣手は

濡れにけるかも

(9・1675)